

長野市象山口遺跡出土の有段口縁甕一例

青木 一男

I 長野盆地における3世紀の土器様相

長野盆地における3世紀の土器様式は、箱清水式土器の終末期に位置づけることができる。この、中部高地型櫛描文と赤彩手法で加飾する地域色の強い土器様相は、弥生時代中期後半から後期の地域社会を象徴するものとして理解されてきた（森嶋1978年、笹沢1978年）。2世紀末を初源とする地域色の強化と後の崩壊過程は、弥生時代から古墳時代における地域社会の時代変遷と画期を解明する手だてとして重視されている。

長野盆地では、ここ10数年の間、当該期の土器様相が明らかとなってきた。そのことにより、地域色の強い土器様相に東海地方に系譜をもつ土器（以下東海系と称す）が共伴し、その現象と歩調を合わせる形で在来の土器様相が変容している実態が論考されてきた。一方、東海地方に系譜をもつ土器とともに、北陸地方に系譜をもつ土器も注意されるところとなり、中野市七瀬遺跡の調査成果（赤塩1994年）によれば、東海系土器波及以前に北陸系土器の波及があったことが明らかにされた。土屋積氏はその波及の性格が異なった事情であることを指摘する（土屋1998年）。

長野盆地では、2～3世紀の箱清水式土器に共伴する東海・北陸系土器についての資料集積段階はすでに終焉し、その解釈が研究課題である。そこで、長野市松代町清野地籍に所在する象山口遺跡出土の受口状口縁甕（第2図）を資料紹介し、今後の研究を模索する^{註1）}。

II 象山口遺跡出土の受口状口縁甕

(1) 象山口遺跡（第1図）

象山口遺跡は、長野市南部の松代町に所在し、長野電鉄河東線象山口駅の南東約200mに位置する。千曲川により形成された自然堤防でも旧河道寄り末端に位置し、古代の遺物が採集される遺跡として注意されてきたが、2～3世紀代の遺物は当資料以外知られていない。

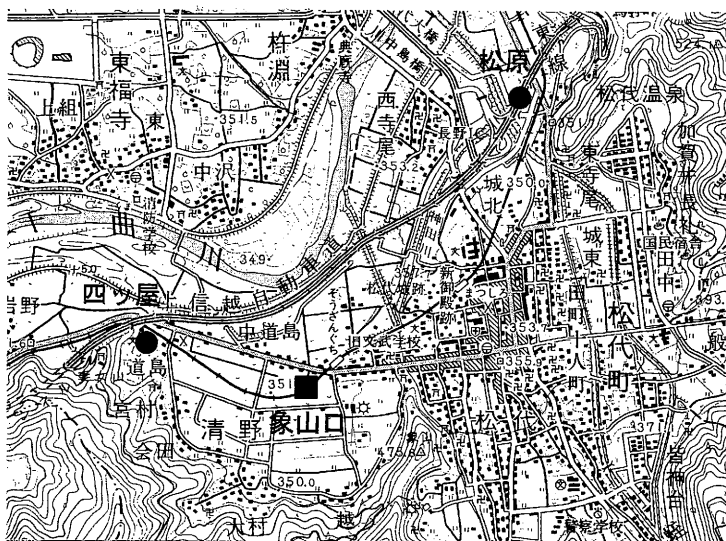
象山口遺跡から視界がきく自然堤防上の遺跡には、長野市四ッ屋遺跡、松原遺跡があり、箱清水式期の集落が発掘調査され、四ッ屋遺跡からは北陸系千種甕、東海系S字状口縁台付甕B類の破片が採集されている。当遺跡は両遺跡の中間点に位置し、四ッ屋遺跡と1km、松原遺跡とは1.5km離れている。

ここに紹介する資料は、昭和40年代の清野地区農地構造改善事業によって自然堤防が平坦化された際、石坂直人氏の畑地より出土したもので、耕作していた石坂氏によって完形状態で採集された。生前、石坂氏は「炭のようなものがつまっていた」と語っておられた。単独出土とされ、共伴資料が現存しないほか、同遺跡出土資料は今日残されていない。出土資料は、石坂氏の御親戚にあたる松代町東松山町在住の山崎元氏によって保存されている。この資料に関し

ては「更級・埴科地方誌」で森嶋稔氏が紹介しているが^{註2)}、筆者はこの図に関心を持ち、大学生時代に山崎氏の許可を得て実測したことがある。この時の実測図を紹介したい。

(2) 受口状口縁甕一例

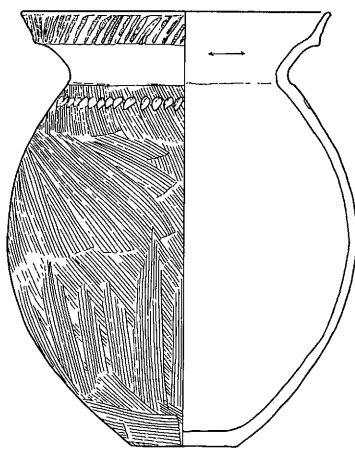
紹介する象山口遺跡出土の甕は、受口状口縁を呈する平底甕である。胴部は、最大径を中位にとり、頸部がくの字状にく



第1図 象山口遺跡の位置 (1:50000)

びれることによって球形状をなすが、胴器高が一定量あるために縦長のプロポーションとなる。頸部径・胴最大径に対して、底部径の占める割合が高い。胴部のプロポーションは、箱清水式甕でも胴最大径を中位にとるタイプと共通する。口縁部は胴部に対して短かめに外反し、有段部をなして受口状を呈する。口縁下半部に対して、受口部が短く薄い器壁で外反することが特徴である。口縁部の形状は当地域の土器様式から系譜を追えるものではない。しかしながら、口径と胴最大径は口径が若干せばまるがほぼ等しく、口径、頸部径、胴最大径底径のバランスは、口縁部が短いことを除けば、箱清水式甕の数値に通じているともいえる。

調整手法は、胴外面にハケメを行い、内面は軽いケズリ後、ナデによって仕上げられている。この調整で仕上げられた器壁は4～5mm程度で、箱清水式甕よりは薄い、特に薄いというほどでもない。胴外面のハケメは幅1.5cmほどの小口板で胴下半から左上がりにかきあげられ、全体の調整を行った後、胴下半と肩部に調整を施す。胴下半部では、底部から胴最大径付近まで直にかきあげ、さらに底部調整のため横方向のハケメを施す。箱清水式甕ならば、底部調整のためのヨコハケ後、胴下半にタデミガキを施すが、このハケ調整は調整段階の類似点と相違点が認められる。この調整は右



第2図 象山口遺跡出土有段口縁甕

回りである。胴部は頸部から肩部にかけて上から下へ短くかきおろされており左回りの調整である。口縁部のヨコナデ調整によってその上部調整痕は明瞭に消されている。ハケメは凹部が凸部に比べて、その幅が狭くしかも深いもので、きめの細かいハケと表現して良い。櫛描文の施文原体で調整したものではない。

施文の特徴として、受口部外面および肩部への刺突列点文があげられる。栗林および箱清水式土器様式には同様な施文は認めることができず、施文からも外来的要素が指摘される。口縁部の斜行刺突文は、胴部調整のハケ調整原体（板状の小口）で刺突され、右回り回転で施文されている。受口部は擬横線文を呈し、その横線がかくれるほど密に施文する。擬凹線文の原体も同一原体と考えられる。肩部の列点文は受口部と原体が異なり、棒状の原体で上から下方向にかき下げ、逆時計回りに重ねて施文している。

以上、象山口遺跡出土の受口状口縁甕について記したがその特徴についてまとめておく。

- i 受口状口縁を呈する平底甕である。
- ii 胴部が球胴化方向にあり、受口部の外反部が短く外方に開く。
- iii 外面ハケ調整、内面軽いケズリ後のナデ調整を行い、ミガキ調整は認められない。
- iv 器形、調整に在来の要素も折衷する。
- v 口縁部外面、肩部を刺突列点文で装飾する。

III 北陸地方に系譜をもつ有段口縁甕

肩部に刺突列点文をもつ有段口縁甕は、北陸地方に散見することができ、箱清水式土器様式圏においても共伴が認められる。その系譜は、北陸北東部地方を発信とする外来系土器としてとらえられる。当様式圏と北陸北東部地方の類例を整理して資料紹介のまとめとしたい。

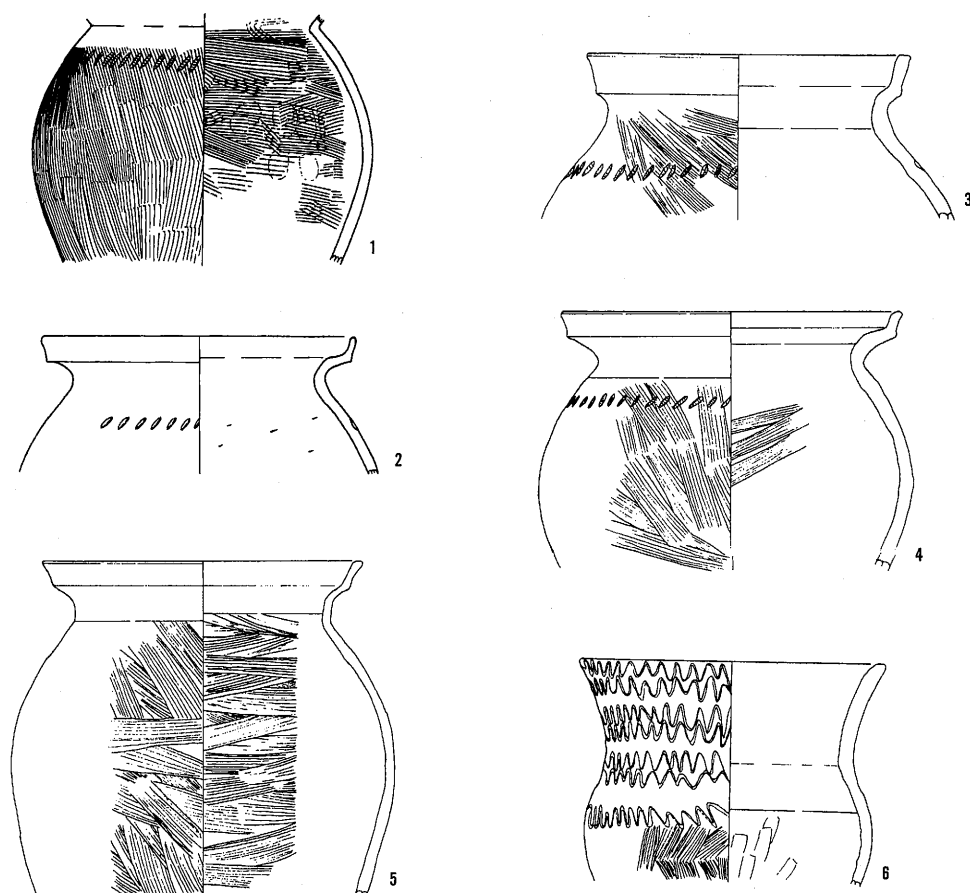
(1) 長野県中野市七瀬遺跡（第3図-1、2）

当遺跡では、北陸地方を系譜とする有段口縁甕、端部面取りくの字甕が比較的多く検出され、中部高地型櫛描文を施文する在来甕と共伴する。報告者の赤塩仁氏は、有段口縁甕を外来系B-1類に分類し「肩部に刻みのある類は、法仏式から月影式期の北陸系土器に系譜を求められよう」とする。肩部に刻みをもつ例は有段口縁甕の中で率は低いが、口縁外面の稜が外へとび出す形態等は象山口遺跡出土例に共通する点が認められ、象山口遺跡例が、北陸系の有段口縁甕の一群と共伴することを予察させる。

肩部に刺突列点文をもつ有段口縁甕は、谷状地形から2点出土している（第3図-1、2）。出土地の性格から時間差が想定される遺物が混在するが、箱清水系土器は赤塩氏の編年するところの七瀬1段階に位置づけられる。外来系土器を考慮するならば七瀬1～2段階となり、谷状地形で出土した有段口縁甕は、赤塩氏が指摘するように北陸地方の法仏式後半段階から月影式に併行する時期に位置づけることができる。

(2) 新潟県刈羽村西谷遺跡（第3図-3～6）

報告者の滝沢規朗氏は、当遺跡出土土器群を法仏Ⅱ式併行期に位置づける。西谷遺跡の主要甕は、氏の分類するところのA・B類有段甕と、C類くの字甕で、能登半島以东のいわゆる北



1・2 七瀬遺跡谷状地形 3 西谷遺跡A区溝砂層 4～6 西谷遺跡B区Va-2層

第3図 七瀬・西谷遺跡出土有段口縁甕

陸北東部の様相を呈する。西谷遺跡における有段甕の組成率は古相段階で53%を占めており、その比率が高い。

西谷遺跡の有段甕には、肩部に刺突列点をもつ例が、七瀬遺跡と同様に、率は低いながらも散見される。A区溝砂層出土例（第3図-3）は、胴中位に最大径をとるそのプロポーションおよび口縁部形態が、象山口遺跡出土例に類似する。ただし、口縁部形態は異なる。溝砂層より出土している高杯は、長野盆地に散見される北陸系土器でも古相のタイプである。一方、B区Va-2層では有段口縁甕（4、5）とともに、中部高地型甕（6）が出土している。中部高地型甕は筆者の後期4段階を前後する時期にあたろう。

(3) 小 結

象山口遺跡出土の有段口縁甕は、北陸地方に類例が散見されることが、富山県上市町江上A遺跡、立山町辻遺跡等でも認めることができ、その時間的位置は後期中葉から終末期にかけてである。法仏式から月影式を考えねばならない。ただし、新潟県刈羽村西谷遺跡や、長野盆地北部七瀬遺跡の類似甕と比較すると、象山口遺跡出土例は口縁部が薄く、外反度が著しいとこ

ろから、法仏式まで上げて考えることには無理があり、月影式以降として位置づけておきたい。

法仏式後半から月影式併行期の箱清水式土器様式は、筆者の後期4～6段階に位置づけられ(青木1998年)、箱清水式の地域色が強化される段階である。この時期はその当初から北陸系譜の甕、高杯が長野市本村東沖、篠ノ井遺跡群等で箱清水式に共伴するが、箱清水式土器様式を崩壊させる要因とはならない。象山口遺跡出土の有段甕も当該期以降の北陸系土器の動向によって製作されたものであろう。ただし、当有段甕は、胴部のプロポーショナルから能登、越中の北陸系土器とは若干様相を異にし、箱清水系の甕に近いものがある。このことは、外来系とされる土器の性格を物語っているとも言える。東日本の弥生時代末から古墳時代初頭の土器の移動形態を類型化した若狭徹氏の類型を借用するならば、〈レベル2〉にあたろう^{註3)}。その発信源にあたっては新潟県頸城地方から長野盆地北部を想定したい。また、土器様式を異にしながらも頸城地方との交流の一端を北陸系とされる土器に垣間見たいと考える。

当資料は、外来系とされる土器の系譜と、派及した土地での受容という問題について示唆的な資料である。有段口縁を呈し、口縁および肩部の刺突列点文という文様施文手法に注目するならば、その系譜は能登以西に求められよう。そして、北陸地方の中でも、東に移動した器種のひとつではないかと考えたい。当資料紹介では、象山口遺跡出土の有段口縁甕が弥生時代後期終末以降の箱清水式土器あるいは箱清水系土器に共伴したであろうことを予想した。

当該期は、中部高地型土器様式圏で鉄器の増加傾向が指摘され、墓には帯円環状鉄釧、鉄剣等の副葬がめだつ。鉄をめぐる交易、流通の一端を土器の動きから考えていくことも、あながち不毛ではあるまい。その日本海ルートの交易窓口が、箱清水式土器様式圏では頸城地方であったことを予想させるものである。

本レポート作成にあたり、赤澤徳明氏に大変お世話になったが、筆者の不勉強の由、生かすことができなかった。氏におわびしたい。また、当土器の時間的位置づけについては今後、北陸地方の皆様は批評していただくことを期待してやまない。

註・参考文献

註1) 長野電鉄河東線は、長野盆地南部の更埴市屋代を起点として、盆地の南東山麓沿いを千曲川の川東を走り、盆地北部の須坂、中野を通過して飯山市木島に達する。この沿線は近世の北国谷街道で、長野盆地南部の河東線は千曲川の自然堤防上を通過する。

註2) P466～467、図II-165象山口、四ッ屋遺跡出土の土師器で提示されている。本書で森嶋氏は当紹介土器について次のように記している。「こうしたモチーフの土器はそのものを指摘することはできないが、東海地方、濃尾平野などに分布する欠山式土器やそれに次ぐ元屋敷式土器の甕形土器に多様されるものである。四世紀初頭のおそらくは、S字状口縁の土器群と関連する資料と考えてよいのではないと思われる。」

註3) 若狭氏は外来系土器をレベル0～3に分類し、レベル0を搬入品、レベル1を忠実な模倣品、レベル2を「外来系土器の典型からは離れているが在来系譜で説明不可能なもの」とする。

原遺跡 弥生・総論 6』(財)長野県埋蔵文化財センター

- 赤塩 仁 1994年『県道中野豊野線バイパス志賀中野有料道路埋蔵文化財発掘調査報告書 栗林遺跡 七瀬遺跡』(財)長野県埋蔵文化財センター
- 笹沢 浩 1978年「中部高地型櫛描文の系譜」『中部高地の考古学』長野県考古学会
- 滝沢規朗 1992年「3 西谷遺跡の編年の位置づけ」『西谷遺跡』刈羽村教育委員会
- 滝沢規朗 1993年「越後における古墳出現前夜の土器様相」『新潟考古学談話会会報』第11号 新潟考古学談話会
- 土屋 積 1998年「第6章 成果と課題—善光寺平北部の古墳出現前夜—」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書14—中野市内その3・豊田村内—』長野県埋蔵文化財センター
- 森嶋 稔 1978年『更級埴科地方誌』第二巻 原始・古代・中世編 更級埴科地方誌刊行会
- 若狭 徹 1998年「群馬の弥生土器が終わるとき」第2回特別展図録『人が動く・土器も動く』かみつけの里博物館